



まる ○福連携

福祉分野からみた異業種との対話

一般社団法人福祉システム北海道代表理事

□連載□ 高橋 銀司氏

■はじめに

福祉システム北海道の取り組み

私は福祉分野に携わって15年。学校に通い資格を取得し、今では福祉教育にも携わっています。ですが、これまで仕事をしている中で、知識や技術が十分だと感じたことはありません。介護福祉士や社会福祉士の「資質向上の責務」にもあるように、その仕事を取り巻く環境、業務内容の変化に適応するため、知識や技能向上に努めなければなりません。「満足していない状態が正解で、常に向上心を持って学ぶ姿勢が大切」。そう実感したときには、すでに福祉システム北海道を設立していました。

当法人は、福祉・介護のピンポイントな働き(業務)に注目してスキルアップを図っていくことをコンセプトに、その道のプロから学べる研修会を実施しています。例えば、入浴介助の「洗髪(シャンプー)」。

方が「洗髪のプロ」として認識されているのではないのでしょうか。

そこで、2019年には美容師から洗髪方法を学ぶ研修会を開いたほか、アナウンサー(コミュニケーション技術)や歯科衛生士(口腔ケア)、整体師(腰痛予防)を講師に招いた研修会も実施してきました。受講者がその道のプロから学んだ技術を利用者に提供し、より良い福祉・介護につなげていってもらえればと思っています。

本連載は「○福連携」と題しまして、気象予報士、歯科衛生士、理容師、美容師として活躍されている各専門職の方々にインタビューをさせていただきました。その仕事に就こうと思ったキッカケや福祉との関係、経験談などを通して得られた情報を読者の皆さんと共有できればと思います。

各専門職の方々へインタビューする前に、私自身がインタビュー力をつけなければ、との思いから、今回はプレ対談「エピソード0」としました。取材のコツなどメディア業界の情報収集業務を担う「リサーチャー」という仕事をされている稲垣理佳氏からお話を伺(うかが)います。

たかはし・ぎんじ 1987年、小清水町出身。障害福祉サービス事業所に勤務しながら、北星学園大学院修士課程修了(社会福祉学)。オホーツク社会福祉専門学校専任教員を経て、2018年4月に一般社団法人を設立。道内福祉系大学、専門学校で非常勤講師としても活動している。介護福祉士、社会福祉士。

トにシンプルに」。知らない世界だからこそ、「いろんな世界があって、いろんな人がいておもしろいな」「勉強になったな」と感じられます。相手の方に対してあまり構えないのも大事で、聞かれる方はもっと緊張しているでしょうから、素直に向き合う姿勢もとても大切だと思います。

Q. これまでの失敗経験にはどういったことがありますか

番組スタッフへの情報の伝え忘れです。ゲストの希望で、どうしても割愛せざるを得ない話もあります。そのことを事前に伺っていたにもかかわらず、スタッフに伝え忘れていて、いざ収録となった際に、台本にその部分が組み込まれてしまったことがありました。そのときは収録担当者がベテランスタッフで、お互いに信頼関係も築けていましたから、収録前の打ち合わせの段階で回避できました。とても助かりましたが、リサーチャーは相手の大切な情報を預かりますし、放送されてしまったら取り消しできません。どんなに忙しくても、「忘れていた」では済まされないのです。「より責任をもって携わっていかなくては」と改めて肝に銘じた出来事でした。そういう間違いはなぜか夜、布団に入って目をつぶると思い出すんですね(笑)。そんなときは布団から出て、明日朝一番でスタッフに伝えるためのメモだけは書いて、携帯電話に貼り付けておきます。次の日は予定時間より早く起きて(笑)朝一番でメールですね。

エピソード0 「連載までの軌跡」

メディアリサーチャー 稲垣 理佳氏



Q. メディアリサーチャーになると思ったキッカケを教えてください

私は引っ込み思案で、就職を間近に控えても将来についてそれほど積極的な考えはありませんでした。メディアの世界に入ったのは、家族がラジオパーソナリティーの募集を知り、応募したのが始まりでした。そのときに、表に出る仕事よりも裏方の仕事に興味を持ち、制作部で音響効果の仕事など番組制作に関わるようになりました。その後はFMラジオ局で広報に就き、番組紹介文を書くことからライティングを覚え、その後、HBCラジオの「ほっかいどう元気びと」という番組のリサーチをする仕事、すなわち「リサーチャー」に就くことになりました。リサーチャーは番組に出演いただく方を探して、その方に取材をさせていただくのですが、そこから取材のノウハウを学びました。

Q. 取材で大切にしていることは何でしょうか

「調べ過ぎないこと」でしょうか。あまり予備知識を入れないのがコツです。まずはフラットな状態から、「この人はどういう人なんだろう」という知らない部分をお聞きしたいんです。下調べをして、核となるものを事前に見つけてしまうと、カチカチに下地を固めてしまい、勝手にこちらでイメージを作り上げてしまう結果につながります。話を聞くときも「小さなころは、どんなお子さんでしたか」など、本人の答えやすい話から質問していくと相手はリラックスして、本人も忘れていた話をいつの間にか話してくださることが度々ありました。そうした話からは、その方のバックボーンが見えてくるんです。そんなときにリサーチャーとしての喜びを感じます。

Q. 仕事を通じて学んだことを教えてください

人の話に耳を傾ける力がつきました。本題から話がそれてしまっても、無理やり話を戻すよりも、それたなりの話を聞いているうちに、また別の良い話が聞ける場合も少なくありません。「傾聴の大切さ」を感じられたのが学びですね。

Q. 難しいと感じるのはどんなときですか

得意分野ではない話を聞くときでしょうか…。そんなときは、事前に「この分野に関しては、あまり詳しくありません」と正直に伝えると、相

いながき・りか 1982年、札幌市内テレビ局に就職。FMラジオのパーソナリティーを経て、番組制作に従事。その後、FMラジオ局で広報業務に転属。2013年からフリーランスでHBCラジオ「ほっかいどう元気びと」(20年3月末終了)ほかで活動。ラジオ番組のライティングや取材などにも携わる。

手の方もかみ砕いて説明してくださるので、正直に言うってしまうのも手段の1つかなと思います(笑)。そうすると、たくさん話してくださる分、深い話になって、そこでもまた「人に歴史あり」だなぁと発見もたくさんありました。資料を付け焼刃で作ったところで、知らない世界はたくさんあるので、相手の方に対しては「フラッ

■あとがき

稲垣さんはリサーチのコツを「調べ過ぎないこと」と話します。一見すると正反対のことを言っているように思えますが、稲垣さんは自信を持って、さわやかに話してくださいました。それは下調べをし過ぎない取材を実践し、数々の場面で相手のバックボーンを引き出してきた経験があるからではないのでしょうか。

介護の場合を考えると、利用者の疾病や障害の特性について事前の把握が求められます。では人格や性格に向き合うときはどうでしょうか。私は、下調べし過ぎたことで先入観を抱き、偏った見方をしてしまうときもあるような気がします。雰囲気、肌感覚、相性など、対面して初めて分かる要素も多い、ということを改めて意識させられました。

Q. 福祉・介護現場で活用できるヒアリング方法をアドバイスいただけますか

私の母はデイサービスに通っておりまして、いつも「楽しかった」と喜んで帰ってきます。家にいると1人でいる時間も多いため、どうしても孤独になってしまうので、デイで介護職の方たちに親身にさせていただくのはとてもありがたいです。デイに通うことが決まると、事前にケアマネさんが母について、これまでどのような生活をしてきたのか聞いてくれますが、それこそ「リサーチ」ですね。すると、やはり介護職の方たちも、その方についてリサーチをする中で、その方に興味を持ってると良いです。人には必ず歴史があって、その方を作上げたバックボーンがあるので、そこに興味を持って向き合えると、お互いに見えてくるものがあるのではないのでしょうか。ちなみに私のバックボーンは「クラシックバレエ」です。母がバレエの助教だったため、私も小さいころから舞台上に立っていましたし、舞台裏や楽屋が大好きでした。そこから裏方の仕事に興味を持つようになり、今の仕事に結びついたのです。

今回、私は稲垣さんが「話している・聴いているうちに」また新しい、おもしろいことが出てくる」と話すのが印象的でした。「○○しているうちに、△△が分かった」と表現できる人は、真剣に取り組んでいるからこそ出てくる言葉であり、そしてそれは成果だと思います。

取材力は稲垣さんに及びませんが、少しでも福祉・介護関係者の方々の参考になるように次回から、異業種のプロの方との話を読者の方と共有していければと思います。よろしくお願ひいたします。

◇ ◇ ◇
今回の「○福連携」は気象予報士の森山知洋さんです。

※対談は感染対策を徹底した上で行っています。

▶一般社団法人福祉システム北海道▶
ホームページ <http://fukushi-sh.net/>
問い合わせ先 info@fukushi-sh.net